

「英語で学ぶ」授業を実現するために

—教師の授業観の変容を通して—

米山 聡 高度教職開発コース

キーワード：英語科，教科の本質，授業観の変容，言語活動

1. はじめに

本報告書では、授業改善を行う中で、教師に起こった授業観の変容と、その変容を踏まえて目指す授業の在り方について述べる。

中学校教師になってからの自分の授業を振り返ると、初任から5年ほどの期間は、教科書本文の日本語訳の穴埋めプリントを作り、文法を日本語で解説し、練習活動を行う、という流れで授業を行っていた。しかし、様々な授業を参観したり、書籍で学んだりする中で、「言語」である英語は、文法や語彙の知識を身に付けることだけではなく、それら知識・技能を実際のコミュニケーションの場面で、相手と思いを伝え合うために活用することが重要である、という考えが自分の中で大きくなってきた。そんな時期に合わせて附属長野中学校に着任し、教師が英語で授業をすることが当たり前に行われていることを目の当たりにし、自分の理想としていた授業がそこにあると思いつつも、「文法指導はどのようにするのだろうか」とや「生徒が英語でコミュニケーションをするために自分は教師として何をすべきなのか」という問いがあった。そこで、教職大学院で学ぶ2年間の機会に、「英語で学ぶ授業」という自分の理想へと近づけていくために、授業実践を省察し、授業改善を図ることとした。

本報告書は、以下のように構成する。第2節では、教職大学院1年目において、CLIL（内容言語統合）を意識した授業を実践したが、その後、見方・考え方を働かせること意識するようになった経緯について述べる。第3節では、教職大学院2年目において、生徒同士あるいは生徒と教師が、英語で考えを交わし合う言語活動を充実させることを意識するようになった自分の授業観の変容を述べる。そして第4節では、2年間の実践を踏まえて、「英語で学ぶ」授業を実現するためにはどのようなことが大事だと考えるかについてまとめる。

2. 教職大学院1年目の実践と学び

2.1 仮説

英語をコミュニケーションのツールとして使う授業として、他教科の内容を題材にして言語活動を行うことで英語の4技能の向上を目指すCLIL（内容言語統合型学習）と呼ばれる指導法の考え方を参考にした。和泉（2016）によれば、言葉は使う中で学ぶべきであり、同時に、学ぶから使えるようになる。このような「Learning by doing」の考え方は、従来の「Learn now, and use later」の考え方と明確に区別される。その考え方を基に、具体的なコミュニケーションの場面を英語の授業で扱うことで、「英語で学ぶ」授業を実現するこ

とができるのではないかと考え、2.2、2.3 および 2.4 の実践を行った。

2.2 2年生の実践

(1) 内容

本授業では、道案内の場面で、教科書のモデル文を口頭練習したり、長野県内の路線図を用いてペアで道案内の練習をしたりする授業を行った。長野県の名所にかかわる情報と、路線図や地図といった資料を「社会科の内容」として取り入れ、道案内という実際の場面を設定してやり取りすることで、生徒は英語をコミュニケーションの手段として活用する＝「英語で学ぶ授業」につながると考えた。

(2) 授業の実際と考察

授業後、教職大学院チームで行ったリフレクションを通して、本実践は、新たな表現（文法）を練習し、それを使って会話をしてみる、という流れであり、私は「英語で学ぶ授業」を構想したつもりであったにもかかわらず、実際には従来の「Learn now, and use later」型の授業＝「英語を学び、それを試す授業」を無意識に行っていたことが見えてきた。また、私の中に、「実際の場面を設定すれば英語がコミュニケーションの手段として働くだろう」という安易な考えがあったことに気が付いた。この「道案内」場面の授業では、生徒が道案内をすることの必要感をもつことができず、道案内に使う表現を学び、それを練習するという学習に留まった。新学習指導要領（文部科学省、2017）が示す「外国語コミュニケーションにおける見方・考え方」の「目的」が明確でなかったことで、相手意識をもってコミュニケーションを行い、メッセージを伝えるという、「英語で学ぶ」授業は実現できなかった。そして、「他教科の内容を英語で学ぶ」という点についても、社会科の内容を生徒が学んだと捉えることができなかった。

2.3 3年生の実践①

(1) 内容

本実践は、「内容」を取り入れた 2.2 の実践を踏まえ、「見方・考え方」を働かせることを意識して行った実践であった。「ロシア人の少年ボリス（教科書の登場人物）に、友などの身近な立場からコメントする」という状況を設定し、ボリスの置かれた状況について、教師が提示する「ロシアの医療事情（ロシアでは医師の社会的地位が近年上昇傾向にある）」資料を基にペアで互いの考えをやり取りし、ボリスにコメントをする活動を位置付けた。

(2) 授業の実際と考察

T生は、友や教師との英語でのやり取りの中で、両親に反対されているというボリスの状況や、ロシア国内で医師の社会的地位が近年上昇傾向にあるという状況を踏まえた上で、「自分が情熱を注ぎこめる夢を追うべきだ。」とコメントを書いた。T生は、英語をコミュニケーションの手段として、様々な状況を踏まえたうえで自己の中で検討を重ね、友とやり取りして異なる考えに触れる中で、自分の考えを記述した。しかし、この実践では、生徒が自分の考えをもってやり取りができたことと、①コミュニケーションを行う目的を明確にしたこと、②社会的な見方・考え方を働かせるための状況を提示したこと（教師の講じた手だて）との関連性が曖昧であった。

2.4 3年生の実践②

(1) 内容

実践 2.3 を踏まえて、生徒が題材に対してそれぞれ自分の考えをもち、英語の言語活動を通してそれらが交わし合うような学習を行うことで、「英語で学ぶ授業」につながる可能性が見えてきた。そこで、道徳を英語で行うようなイメージで、アフリカの貧しい村の少年、ウィリアム・カムクワンバを扱った実話を読み、読んだことを基に友と考えや感想を伝え合う学習を構想した。ここでは、読むこと、話すこと以外に、TED のスピーチを視聴する、自分の考えを書くという活動を行い、4 技能を統合させた。技能統合をすることで、読んだり聞いたりしたことについて話す、話したことを基に書く、というような、実際のコミュニケーションに近い状況が設定され、生徒は「英語で学ぶ」ことができると考えた。また、生徒と同年代の人物を扱った題材であるため、生徒が、「他の生き方から学ぶ」という明確な目的をもつことができると考えた。

(2) 授業の実際と考察

第1時、教科書の内容を読んだK生は、振り返りカードに「I can't be like William.」と書いた。ウィリアムの人生と自己の人生を重ねて、ウィリアムの成し遂げたことを偉大だと感じた様子であった。第2時、教科書を読んだ感想を友と英語で語り合った。K生は、貧しくて学校を退学せざるを得なかったウィリアムが、退学後も図書館に通い学び続ける姿について、友と感想をやり取りし、そこまでできるウィリアムの夢や目標はいったい何なのか、問いをもった。第3時、ウィリアムがTED に出演したときのスピーチを聞き、ウィリアムの状況を改めて確認した。そして友と感想をやり取りしたり、全体で数人の友の考えを聞いたりする中で、振り返りカードに「友の考えに共感した。当たり前だと思っている生活に感謝しなければいけない」と書いた。第4時、これまでの単元を振り返り、「ウィリアムの生き方から学んだこと」や「自分の生き方に生かしたいこと」を書いた。その中でK生は、「自分の力を信じて挑戦していきたい」と書いた。

本研究の目的に照らして考察すると、K生は、実際のコミュニケーションの場面と同じように、読んだことや聞いたことを基に話したり書いたりする場面と「他の生き方から学ぶ」という目的を設定したことが、充実した言語活動を促したのではないかと考える。

2.5 1年目の成果と課題

「他教科の内容を英語に持ち込むこと」＝「英語で学ぶこと」ということについては、明確な根拠をもって示すことができなかった。そこで、これまでの実践を見直し、仮説を立て直す必要を感じた。ただし、生徒が実際のコミュニケーションを通して、「自分の考えを述べる」ことや、「他の生き方から学ぶ」姿が見られたことで、生徒の言語活動が充実することに、「英語で学ぶ授業」の鍵があるのではないかと見えてきた。

3. 教職大学院2年目の実践と学び

3.1 1年生の実践①

(1) 内容

1年生が、英語で3ヒントクイズを出し合う学習を構想した。本授業は、入学間もない生徒が、小学校での外国語活動での知識・技能を総動員してやり取りする姿を期待して行った。

(2) 授業の実際と考察

この実践後に、教職大学院チームでのリフレクションを行った。その中で、I生が、教師が提示した「たまご」についてのヒントを英語で友に伝えるために、「White in yellow!」と表現した。中学校に入学して1か月余りの生徒たちが、どうにか伝えようと、知っている英語を総動員している姿が見られたこと、チームの先生方から「先生が楽しそうだった」とコメントされたこともあり、自分の中で充実感が高かった実践である。今振り返ると、この実践の時には、生徒の文法的なミスを気にしない自分、生徒の英語を楽しんでいる自分がいたように思う。

3.2 1年生の実践②

(1) 内容

互いの考えを伝え合う、相手のことを知るという目的をもち、友と考えをやり取りする場面を設定することで、様々な考えを「英語で学ぶ」ことができると考え、「My Hero」を紹介し合う学習を構想した。教科書の人物たちの会話を参考に、人物を紹介したり、人物について尋ねたりする際の視点を共有し、それらの視点を基に英語で互いの「My Hero」についてやり取りする形で紹介し合った。

(2) 授業の実際と考察

M生は、毎時間の単元の学習の中で、友と互いの「My Hero」を紹介することを通して、人物の情報、自分の考えや感想、そう考える理由など、次第に視点を広げるとともに、それらを伝えるための英語の表現を獲得しながら、自分の「My Hero」についてや、学級の友について知っていった。教師は、単元を通して生徒の紹介する「My Hero」に質問やコメントをしたり、自らも「My Hero」を紹介したりして、生徒とのやり取りや相互理解を楽しんだ。

4. まとめ

「英語で学ぶ」授業の実現を目指して実践を繰り返す中で、さまざまな気づきが私の授業観に影響を及ぼした。「英語で学ぶ」を理想に掲げながらも、知識・技能を重視しており、CLILのように他教科の内容を扱う方法を模索しながら「英語で学ぶ」授業を実現しようとしていた自分に気付けたことで、自分が本当に目指す授業がどのようなものかが見えてきた。そんな自分が、生徒の考えに英語で触れることに楽しさを感じ、文法や語彙の指導よりも、やり取りを通じた相互理解を楽しむようになったことが、私の変容である。そのことに気付いた今、今後の自分の授業が実際のコミュニケーションの場となり、温かな英語のやり取りが行われるような授業を構想していくことに、意欲が湧いてきている。

引用文献

文部科学省 (2017). 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説外国語編』 東京：開隆堂.
和泉伸一 (2016). 『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業』 東京：アルク選書.